

## 河角龍典先生を悼んで

中本 大

はっきりした記憶はないものの、河角さんと初めて会ったのは、私が大学に赴任してそう間もない頃だったと思う。当時、大学院後期課程の学生で、博士論文執筆準備に余念のなかったはずなのに、日本文学関連の授業にもよく顔を見せていた。概論だったか文学史だったか定かではないものの、しばらく顔を見なかつたと思つたら、とても体格がよくなつて戻つてきたことに驚いたのを憶えている。立命館に来たばかりで、何かと覚束なかつた私は、風格ある学生に値踏みされているように感じて、兢兢としていたことだけは忘れていない。

彼を同僚の研究者だと認識したのは、立命館大学がCOEに採択されて、様々な研究グループが走り始めた二〇〇二年くらいだったと思う。文学・歴史・地理などの人文系諸分野と情報学が協同する取り組みの中で、河角さんが色々な先生方から依頼された仕事を黙々とこなしている姿を見ながら、気の毒に思つていたのであつた。

そのCOEだったか、あるいは後続のGCOEだったか、江戸図屏風に描かれた数多の人物表象に関する彼の報告には、感嘆させられた。「この人と一緒に仕事をしたい」——そんな思いがはっきり刻まれたのもこの時だった。

河角さんは任期制講師として立命館大学に採用された後、二〇〇九年、新設された京都学プログラムの専任教員として着任した。プログラム設置に関わつた私が最も困つたのが、「地図」であつた。なにしろ水墨画を

見ても、文字情報に変換して画題事典にしてしまう性分で、図像データが脳裏に刻まれないことを自覚して美術史を諦め、日本文学研究に進んだのだから。なので、分からないことは何でも河角さんに質問した。さぞ迷惑な「教え子」だったと思うが、頼まれたら嫌とは言えない人柄、彼の弱みに付け込んで、平安時代から近代にいたる京都の地図情報について勉強した。有意義な時間だった。自分の知らないこと、分からないことをあれだけ素直に聞くことができたのは、立命館大学に着任して初めての体験だった。河角ゼミの学生が私のところに質問に来ることもあつた。私には難しかつた文学と地理学の境界を、学生たちは軽々と超えていくのである。京都学の可能性に胸躍らせたことを憶えている。

京都学プログラムの完成年度を迎え、私は他の教員と交替して京都学専攻を離れ、自らの専攻に戻ることになった。年度末の慰労会で、彼から「中本さん、ずっと京都学に居るってことはできないんですかね」と言われたことは忘れられない。「文学部のすべての先生に京都学の科目を担当してもらおうのが理想だから」と持論を述べ、その時はかわしたものの、専任教員の少ない専攻運営で苦勞する彼の気持ちは痛いほど分かつていた。そしてそう遠くないいつか、再び京都学専攻に所属するつもりであることも敢えて言わなかつた。

手術・療養に入ったのち、冬の立文会で元気になつた彼と杯を重ねたのも束の間、遠くに旅立ってしまった。亡くなる少し前、姿を見かけた

とき、「大学のことも学生のことも、何も考えなくていいから、ご自分のことだけを考えてほしい」ということを絞り出したとき、もちろん彼の答えは分かっていた。そしてそれに対して何も言えなかった。

今回の追悼文集では彼にもいろいろと聞いてもらった『方丈記』に関する論考をまとめようと考えていた。ただ「試論」になることは河角氏に申し訳なく、もう少し考察を深めてから発表しようと思いついた。実

は彼にヒントをもらった『大鏡』や『徒然草』についても未だ何一つ形にできていないのである。私自身が京都学プログラムで学んだことを成果として提起できるまで、河角さんとはつながり続けていると思っている。

(本学文学部教授)